

経営(継承)のツボ

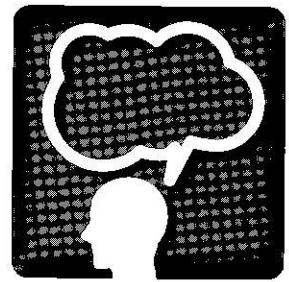


転期に立つ経営の視座①

大将の戒め

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役



孔明にみる9つのリーダー像

本連載は11年日に突入することになった。そこで今回から副題を「転期に立つ経営の視座」と改め、物(者)の見方について記していきたい。まずは将副論である。

これについては『三国志』に登場する蜀の劉備りゅうひに使えた知謀の軍師・諸葛孔明しよかこうめいの遺文を編集した『諸葛亮集』に、現代にも通じる考え方が記されてある。将帥(軍隊を指揮・統率する將軍)は9つのタイプがあることされ、多種多様なリーダーの排出如何が事業命運のカギを握ると言える。

仁将 徳と礼をもつて部下に臨み、飢えや寒さに襲われようと苦勞をとにもする。

義将 旺盛な責任感をもって将としての務めを果たし、自分の利益を試みない。

礼将 高い地位にあつても鼻にかけず、敵に勝つても得意顔はせず、賢明ではあるが腰が低く、剛直ではあるが忍ぶべきところはよく耐え忍ぶ。

智将 奇略縦横、いかなる事態にも対応でき、禍を福に転じ、危機に立たされても勝ちを制する。

信将 信賞必罰をもって部下に臨み、約束は必ず守る。

歩将 軍馬よりも早く走り、闘志満々、よく国境を固め、剣戟(剣や鉞などの武器)に長けている。

騎将 高い山や険しい道をもともせず、馬上から放つ矢は飛ぶがごとく、進撃するときは先鋒、後退するときは殿を務める。

猛将 先頭に立つて全軍を叱咤し、いかなる強敵にもたじろがず、相手が大敵であればあるほど闘志を燃やす。

大将 相手が賢者とみれば辞を低くして遇し、快く諫言に耳を傾け、寛容なうえに剛直さを失わず、勇敢なうえに機略にも富んでいる。

大将とは……どうあるべきか

30代前半の経営者の開設した介護事業所を訪問したとき、江戸幕府を創設した征夷大将軍徳川家康の「大将の戒め」を事務室に掲げているのを目にした。

「大将の戒め」 徳川家康

大将というものは

敬われているようで、

その実、家来に絶えず

落度を探られているものだ

恐れられているようで侮られ

親しまれているようで疎んじられ

好かれているようで憎まれているものじゃ

大将というものは絶えず勉強せねばならぬし

礼儀もわきまえねばならぬよい家来を持つとうと思ふならわが食を減らしても

家来にひもじい

思いをさせてはならぬ

自分一人では何も出来ぬ

これが三十二年つくづく

思い知らされた家康が経験ぞ

家来というものは

禄でつないでならず

機嫌をとつてはならず

遠ざけてはならず

近づけてはならず

怒らせてはならず

油断させてはならぬものだ

「ではどうすればよいので」

家来には

惚れさせねばならぬものよ。

1616(元和2)年6月

大将には、狭い範囲のなかで自分が一番であると得意がる「お山の

大将我ひとり一人」もいる。

「大将は、どうあるべきか」

大将への箴言である。

*「経営(継承)のツボ」は、これまでの10年間・120回にわたる連載を「介護福祉経営士サブテキスト・人間カシリーズ1」199の言葉の杖」として再編集6月に刊行させていただきます。ご購入を賜りますようお願い申し上げます。